

追悼 青木 昌彦

国際的に名が知られている日本の数理経済学者は指折り数えられるほど少数である。優れた数理経済学者は自らが展開する理論と政策との間に、大きな乖離が存在することを認識しているから、自らの理論的結論を単純に経済政策に展開できるとは考えない。ところが、中途半端な数学を使うマクロ経済学理論を専攻する経済学者は、深い思慮なしに、単純な数式を使った理論的結論が直に政策に展開できると考える。経済学者が思考する対象は、限りなく単純化された抽象的経済システムであり、そこから得られた結論が現実経済を動かす力にはなり得ない。高々、部分的現象を「理解」する手がかりになるに過ぎない。しかし、多くのマクロ経済学者と称される人々は、それで国民経済全体が理解できたと錯覚する。きわめて単細胞的である。優れた経済学者は自らの限界を知るから、簡単に政策提言など行わない。そこが凡才経済学者との違いである。

数学出身の二階堂氏や宇沢氏の後、数理経済学の世界で名を知られた日本人経済学者は、雨宮健氏と青木昌彦氏（共にスタンフォード大学）である。

雨宮健氏は国際基督教大学（ICU）出身で、スタンフォード大学助手の時代に、1 Semesterだけ ICU で講義されたことがある。1969 年秋、筆者はその講義（市場均衡解の存在証明）を受講した。講義のほとんどが「不動点定理」の解説に当てられた。

他方、青木昌彦氏は 60 年安保の主流派全学連の論客で、姫岡玲治のペンネームで論陣を張った人物として知られている。東大大学院で玉野井芳郎教授のセミナーに入り、その後、ミネソタ大学大学院を修了して、スタンフォード大学で職を得た。ノイマンが編み出した分析手法はたんにゲーム理論や均衡分析のみならず、線型等式体系あるいは不等式体系で経済制度を叙述する方向へ応用された。2007 年にノーベル経済学賞を受賞したハーヴィッツの業績はこの分析手法を評価されたものだが、青木氏の処女作『組織と計画の経済理論』（岩波書店、1971 年、第 14 回日経・経済図書文化賞受賞）は、ハーヴィッツの分析手法を社会主義経済計画化の制度分析に適用したものであった。当時大学院生だった筆者がその書評に挑んだ懐かしい作品である。

ハンガリーの経済学者コルナイが 1972 年にノーベル賞受賞経済学者ケネス・アローの招聘でスタンフォード大学に留学した折、青木氏の隣に研究室を得たことから、コルナイと青木氏の親交が始まった。ともに、制度学派的な分析を特徴としていたから、相互に学び合うことができたのだろう。コルナイが国際経済学連合（IEA）会長を終えた後、青木氏が 2008 年から 2011 年まで会長を務めた。

筆者は 1981 年、法政大学社会学部創設 35 周年記念行事にハンガリーからコルナイを招聘し、講演とセミナーを組織した。宇沢氏には「不足の経済学」をめぐるセミナーの議長を担当してもらい、青木氏には京都大学でコルナイの講演会を開いてもらった。また、『コル

ナイ・ヤーノシュ自伝』(日本評論社、2006年)の発刊時には、日本経済新聞に長文の書評論文を出してもらった。

その後、青木氏はブダペストにコルナイを訪ねられたが、会う機会はなかった。日本に戻られた後に、短期間ブダペストを訪問したこと、また次回のブダペスト訪問で是非会い旨のメールを受け取ったが、その約束が果たされることなく、2015年夏にお亡くなりになった。